SSSS

風待月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＳＳＳ

【Ｎコード】
Ｎ０５８９ＢＡ

【作者名】
風待月

【あらすじ】
――現代に『魔法』があったら、どうなると思う？　なんでもできる『魔法使い』にも、どうにもならない事はある。
たった３０年前に《魔法》が現れた世界、常人以上超人未満の《魔法使い》たちの、普通以上特殊未満の学生生活。

【＊検証用実験文章です。お見苦しい点があることを理解して頂いた上でお楽しみ頂ければ嬉しいです。感想・指摘などの形で検証に

協力頂けたら幸いです】

００―０００　６月２日のはじまり

「歯ぁ食いしばって腹に力入れろよ！」
「え！？　ちょっと堤（つつみ）さん――！？」

堤十路（つつみとおじ）の人生における願いは、普通に生きること。
心身健全・学業大成・金運招福・大願成就。いずれも高望みなんてしていない。
風邪で寝込んでも入院しなければＯＫ。１００点は無理でも赤点取らなければ問題なし。裕福でなくても借金なく生活できればいい。
ついでに明かすと、恋愛成就なんて願望も全く持っていない。
何事もほどほどで十分。出る杭は打たれる。過ぎたるは及ばざるがごとし。
当然、揉め事なんてまっぴら。
基本は待ち、受身の姿勢。トラブル解決不可能なら逃げることも躊躇しない。男らしくないという文句は聞き流す。
だから家族からは『なぁなぁ主義』と言われてる。
そんな彼が……いや、普通なら誰でもそうだが。

「轢いたーーー！？」

街中でオートバイに乗ったまま、人間に突っ込むことになるとは想像もしていなかった。
推定体重７０ｋｇの物体に、車体＋２人の人間＝３５０ｋｇ超の重量が、それなりの速度でまともに激突。はねられた男は、カエルが潰れたような声を上げて吹っ飛んだ。
しかしブレーキをかけながらの衝突なので、死ぬほどではないだろう。

「よし」
「人身事故を起こして平然としてる堤さんが怖いです……」
「前の学校で何回もやったから慣れた」
「どんな学校ですか！？」
「そんなことより――」

残るもう1人が、人身事故を正当防衛と証明してるので、なにも問題ない。
仲間がオートバイにはねられるという突然の事態に、呆気に取られた男の手には、黒光りする金属の塊。
我に返った瞬間、それを向けられるのは、想像にかたくない。

「あっち、木次（きすき）の担当でいいのか？」
「え！？　あ、はい！」

リアシートに乗った学生服の少女が、構えた長大な杖を男に向けた途端、空間に淡く光る幾何学模様が描かれる。
それはあたかも魔法陣。

「実行！」

その一言で小規模ながら、超常の落雷が発生し、残る男に直撃。
手にしていた金属塊を取り落とし、薄い煙を上げて崩れ落ち、見ていると不安になる痙攣をする。

「……そのエゲつなさで、俺が人をはねたの、文句言われたくない」
「ちゃんと手加減しましたよ！？」
「銃が暴発したらどうする気だったんだ？」
「えーと……結果オーライということで……」

「それで、どうすればいい？」
「追ってください！」
「了解」

はね飛ばしてうめいてる男と、感電してうめいている男は、誰かがなんとかしてくれるだろうと判断し、十路はオートバイを発進。

「やっちまった……」

堤十路（つつみとおじ）の人生における願いは、普通に生きること。
揉め事なんてまっぴら。
家族からは『なぁなぁ主義』と言われてる。
だから。
《魔法使い》の少女を後ろに乗せて、誘拐犯をオートバイで追いかけるなんて、目標から真逆の時間は望んでいなかった。

００＿０１０　ＡＭ１０：４７　静岡県御殿場市某ファミレスにて（前書き）

検証事項：ぱっと見読めない固有名詞
この小説に登場する諸々は、実在の人物や企業・団体とは関係ありません。実在の地名は出てきてますが、微妙に違ったりしてます。

００―０１０　ＡＭ１０：４７　静岡県御殿場市某ファミレスにて

「お待たせ致しました」

ドリンクバーのコーヒーと、オレンジジュースしか乗ってなかったテーブルに、ウェイトレスの手で、チョコバナナパフェと伝票が置かれた。

「サーンクス」
「ごゆっくりどうぞ」

朝食には少々遅く、昼食には早い時間の、静岡県御殿場(ごてんば)市。
７月を過ぎれば登山客が増えるのだろうが、まだ６月のために人もそう多くない、富士山麓の一角に構えるファミレスで、１組の男女が向かい合うテーブルから、ウェイトレスが離れた。
早速パフェの器にスプーンを突っ込むのは、中学生と思える小柄な少女。
それを頬杖をついて眺めているのは、少年と呼ぶには少し過ぎた高校生。

少女の雰囲気は天真爛漫(てんしんらんまん)。
大胆に足を出していても色気は感じず、健康そうな印象が先に立つ。幼さが残る明るい顔立ちには、どこかイタズラ小僧のような愛嬌がある。
げっ歯類の動物を連想。そう聞けばリスやハムスターが思い浮かぶだろうが、トゲだらけのヤマアラシも当てはまる。

青年の雰囲気は怠惰(たいだ)。
『鋭い目つき』と言えば聞こえはいいが、気が抜けていれば人相

が悪いだけ。量販店のポロシャツとジーンズに包まれた体は細身の筋肉質だが、背筋を丸めて頬杖をついていれば、そんな体付きは隠されて、ただだらしない。
例えるなら野良犬。ただし今はエサをもらって満足そうに昼寝してます。

少女の名前は堤南十星（つつみなとせ）。
青年の名前は堤十路（つつみとおじ）。
顔立ちも雰囲気もあまり似ていないが、2人の関係は同じ姓が示している。

「なとせ。ほら、ついてるぞ」

パフェグラスに半分顔を突っこんでいたために、鼻の頭についたクリームを、テーブル越しに手を伸ばしてナプキンで拭いてやる。

「さんきゅー」
「久しぶりに会うけど、お前、なんも変わってないなー……」
「相変わらず食べ方が子供っぽい？」
「……まぁ、そんなとこ」

Tシャツの上に羽織ったミリタリーベスト、今はテーブルの隅に乗せているキャスケット帽、履いているのはデニムのホットパンツにバスケットシューズ。
少年にも見えてしまう南十星（なとせ）の服のことを考えていたが、それは口に出さない。

「悪いな、なとせ……平日なのに呼び出すことになって」
「気にしない気にしない。たった2人の兄妹（きょうだい）じゃん。それに今さら学校休んだところで、あたしゃ補習受ける成績だし」

「お前なぁ……」
「兄貴、そんなことより」

連絡自体はそれなりにしていたものの、直接顔を合わせるのは数カ月ぶり。
はるばる飛行機に乗って会いに来た南十星（なとせ）は、スプーンを置いて、再会と転機を祝った。

「退学おめでと――を〝っ！？」

多大な怒りと、ほんの少しのやるせなさと、わずかばかりの『コイツやっぱりアホだ』という再認識が込められた、十路（とおじ）の渾身のデコピン炸裂。
額を押さえた南十星（なとせ）、二人掛けのソファを涙目でのたうち回る。

「なにがめでたいかこの愚妹（ぐまい）がぁ！？」
「『シャバの空気ウメー』って感じっしょ！？」
「規律の凄まじい学校だったよ！　刑務所出たような気分ではあるよ！」
「だったらめでたいじゃん！」
「寮を追い出されたら生活に困るんだけどな！？」
「こっち来りゃいーじゃん。おじさんたちも『そうしろ』って言ってくれてたよ？」
「いや、気持ちは嬉しいけど……」

早急に解決しなければならない現実的な話になり、そして店内の非難の目にも気づき、声のトーンが下がる。
２人の両親は、すでに他界していて、子供の頃に生活していた家もない。
だから南十星（なとせ）は、十路（とおじ）が全寮制学校に進学したのを機に、伯父の

ところで生活することになり、そして十路(とおじ)は学生寮が唯一の寝床だったのだが――

「じゃあ、どうすんの？　いつもの『なるようになるさ』的なぁなぁ主義を発揮しても、どうもできないっしょ？」

その質問に答えず十路(とおじ)は、Ａ４サイズの封筒を差し出した。

「なにそれ？」

「学校案内、だろうな……」

封筒の下部に印刷されているのは、『学校法人　修交館(しゅうこうかん)学院』という文字と、兵庫県神戸市の住所。

既に封は切ってあるので、遠慮なしに南十星(なとせ)は中身を確認する。

「わぉ、すっごい学校じゃん」

厚手のパンフレットにカラー印刷されているのは、広い敷地に建つ、まだ新しい校舎群と、充実した学校設備の数々。

私立校に多い付属型。いわゆるエスカレーター式なのか、法人全体だと幼稚園から大学まで同じ名前の学校があるらしい。

「このパンフ、兄貴が頼んだの？」

「いや。１週間くらい前に、なぜか寮の机の上にあった」

「なんで？」

「俺が訊きたいよ……」

それはつまり、通常の郵便物とは違って、学校の事務局も寮監の手も通すこともなく、正体を知られないよう誰かが直接、十路(とおじ)にこれを渡そうとしたということ。

中身がパンフレットだけなら、十路（とおじ）の今後を心配する誰かの親切と考えることもできるが、同封されていたのは、それだけではなかった。
転入時に必要な書類もろもろ。授業料免除の申請用紙。学生寮の入居に提出する書類その他。
極めつけは、既に十路（とおじ）の顔写真が貼られている、修交館学院高等部3年生の学生証。

「どーやら俺は、その学校からスカウトされてるらしい……正直、不気味なんだけど？」
「まさか兄貴の退学と関係してんの？」
「わからない。関係ないと断言できないけど、関係あるとは考えにくいんだが……」

十路をスカウトとするために、退学させる暗躍があったとは考えられないが、見知らぬ学校の誰がどこで十路の退学話を聞いたかという疑問が残る。

「でも、こんな物まで渡されたからな……」

そう言いながら十路（とおじ）が見るのは、ソファの隣に置いたケース。
縦３０ｃｍ、横４０ｃｍ、厚さ１０ｃｍほどの、アタッシェケースのように合金に覆われている小型のもの。

「そーいやさっきからソレ、気になってたんだけど、中身なんなの？」
「秘密だ。お前には見せられない」
「エロ本ぐらいどーってことないって」
「すぐそっち方面を連想するところに、お前のダメっぷりが表れてる」

「男が女に見せられないモンって、それくらいしかないじゃん？」
「アホか」
「あ、妹モノとか制服モノならまだしも、母親モノとかホモだったら引くな……」
「……話を戻すな？」

人一人のこととはいえ、これだけの用意をするとなると、金銭的に決して安くない額を使うことになるはずだが。

「どこかの誰かが心配してくれるのは嬉しいけど、ここまでする価値が、俺にあるか？」
「あるじゃん？　特殊な才能と経験の持ち主」
「それこそありえない」

十路（とおじ）はコーヒーカップを持ち上げて、すする間の一呼吸分で、自嘲にならない準備をしてから口を開く。

「――お前もわかってるだろ？　それが俺が育成校に通うことになって、今回退学になった理由だ」
「じゃあ？」
「わからない。だから、これからその学校に行ってみて、直接話を聞いてみる」
「いきなり行って大丈夫なの？」
「もう電話してアポは取ってるよ」

南十星（なとせ）がストローでオレンジジュースに浮かんだ氷をつつく。随分つまらなそうな顔で。

「……そこに転入するかどうかは、その話次第ってこと？」
「そういうこと。条件次第ではこの不気味な誘いに乗ってもいいし、

無理だと判断したら……伯父さんに迷惑かけるかもしれない」
「メーワクかけるって言っても……こっちに来るって意味じゃないよね？」
南十星（なとせ）は歳相応のすねた顔で、十路（とおじ）の顔を見つめる。
「あぁ……そうなるな」
対して十路（とおじ）は歳には似つかわしくない、諦めのような老齢さで溜息をつく。
そんな様子に南十星（なとせ）は気まずげにストローを動かして、迷った末に口を開いた。
「……さっきは茶化したけど、あたしは兄貴が退学になって、よかったと思う」
「まぁ、な……」
「兄貴はどうなの？」
「生活には困るけど、もうあんな事に関わらなくて済むから、ホッとしてるのが正直なところ」
「だけど、もう一緒には暮らせないんだ……？」
「俺はお前の近くにいるべきじゃない。俺たちは親がいないから、家庭の事情がややこしいし、なにより普通に生きれる境遇じゃない」
「……」
無言になった南十星（なとせ）の、ストローを動かす手が止まった。
「……あいつら、ふざけてる」
人懐こい瞳が細くなり、獣じみた光が宿る。普段はリスの愛らしさに隠れた、ヤマアラシの攻撃心。

「なとせ」

何気ない呼びかけに冷たさがこもる。怠惰な野良犬が伏せたまま、軽く牙を覗かせた。

「だって……みんなして兄貴のこと、バカにしてるじゃん……」

それだけでヤマアラシは大人しくなり、シュンとして逆立てた針毛を寝かせた。

「仕方ない」

そして野良犬は苦笑して、ヤマアラシを慰めて、リスの毛皮をかぶせようとする。

「ただでさえ、俺は世界で一番夢がなくて、一番面倒の多い人種なんだぞ？」

言葉を切って、コーヒーカップを空にして。

「――俺は《魔法使い》なんだ。しかも出来損ないの」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

世界には、《マナ》を操り《魔法使い》と呼ばれる者が扱う《魔法》が存在する。

しかし秘術ではない。誤解と偏見があったとしても、その存在は使えない常人にも広く知られたもの。

そして古(いにしえ)よりのものではない。たった３０年前に発見され、未(いま)だそのあり方を模索している新技術。
なによりもただのオカルトではない。その仕組みの詳細は明確になっていないものの、証明が可能な理論と法則。
知識と経験から作られる再現可能な奇跡。それが現代における《魔法》。

その力は、多岐に渡る分野で応用が期待されている。『空気を操る魔法』と『空を飛ぶ魔法』による金属化学の新素材開発、『炎を操る魔法』の応用で新エネルギーの研究、『治癒の魔法』で最先端医療でも不可能だった治療法の確立などなどなど。
つまり現代社会における《魔法使い》は、優れた科学者であり、技術者であり、研究者でもあると、世間的には定義されている。

しかし存在そのものは知られたものであるが、《魔法使い》は日常的な存在ではない。
その価値が発揮されるのは、人々の生活に直接関わる部分ではないため、まず知られないからだ。
加えて《魔法》を扱える人間は非常に少ないという理由もある。
人ならざる知識を処理するための特殊な脳機能を持つ人間は、遺伝学的に数千万分の一の確率でしか誕生しない。

そのため現代では、世界的にも貴重な人的財産として扱うことを、法律で定めている国がほとんど。幼少期の検査で適正があると判断された子供は、レベルごとにそういった全寮制の学校に集められて生活し、一般教養と並行して専門技術の教育を受けることになる。
十路(とおじ)が通っていたのも、そういった特殊教育機関、通称『育成校』。
完全寮制、生活費も学費も全て国費で賄われ、次世代の発展に必

要不可欠な人的財産を、未来を作り出す人材へと育てると謳(うた)った国家機関。

堤十路(つつみとおじ)は、そんな学校を強制退学させられた。

彼が『出来損ない』になったから。

００_０１０　ＡＭ１０：４７　静岡県御殿場市某ファミレスにて（後書き）

１／５　前書き修正

００_０１５　ＰＭ１５：２３　インターミッション０１（前書き）

インターミッション（任意の合間）を初っ端のこの辺に挟むのもどうか……と思いつつも挿入。
今回は本筋のストーリーには直接は関係ない、オマケ的文章という形で使っています。

00_015　PM15：23　インターミッション01

「つばめ先生、入りますよ……」
「お、来たね、ジュリちゃん」
「わざわざお茶を淹れさせるのに、授業中に呼び出すの、やめてください……」
「いや、そうじゃなくて」
「急に『お鍋食べたくなった』なんて言われても用意できません……」
「いや、それでもなくて」
「じゃあ今日の晩ご飯、なにが食べたいんですか……？」
「どうしてわたしが口を開くと、そういう用事だと思うの？」
「いつもそんな用事で呼び出されるからですよ……」
「授業中には呼んでない！　わたしもそこまで非常識じゃないつもりだよ！？」
「じゃあ今日は……？」
「ちゃんとした部活」
「今朝の事件でなにか連絡が来たんですか？」
「うぅん、別口。転入生が来るから、駅まで迎えに行ってほしいの。簡単な資料は携帯電話に送っておくよ」
「それこそ私じゃなくてもいいじゃないですかぁ……」
「わたし、忙しいんだよね～」
「いま思いっきり遊んでるじゃないですかぁ……」
「まーそれは冗談として、わたしより、キミたちがやるべきことだと思うから」
「はい？」
「『普通の転入生』じゃないの」
「……そういうことですか」

「諸々のことを考えた結果でもあるし、しかも今日は――」
「部長、学校にいないんでしたね……」
「うん。ついでに3年生の男のコだし、やっぱり同年代の女のコの方がいいと思うからね」
「え？　先輩なんです？」
「そうだよー。6月のこんな中途ハンパな時期に来る謎の転校生。パンくわえて走ってたら曲り角でぶつかって恋に発展しそうとか思わない？」
「や、全然……というか何年前の少女マンガですか」
「最近の若いモンは形式美を理解せんのぉ」
「ともかくわかりました……お迎えには行きます」
「あ。さっき届いたって連絡があったから、迎えに行く時には、部室の新しい備品を使って」
「はい？　備品？」
「そんでさぁ、約束の時間からもう5分過ぎてるから、急いでね」
「それ先に言ってくださいよぉ！？」

００＿０２０　ＰＭ１５：３７　木次樹里（前書き）

伏線いっぱい。しかも今回の実験文章ではなかなか回収しないのを

００―０２０　ＰＭ１５：３７　木次樹里

普通列車と新幹線を乗り継いで４時間余、南十星（なとせ）との話し合いを終えて、堤十路（つつみとおじ）がやってきたのは新神戸駅のロータリー。

退寮直後に近場のファミレスで家族の話し合い、そしてすぐさま長距離移動としてきた割には軽装で、合金製のケースをぶら下げただけの、ほぼ身一つ。

「遅い……」

高校生の腕には少々高価なミリタリーウォッチを見て、周囲を見渡す。

この動作は何度も繰り返した。

先日、修交館学院の事務局に連絡した際には、駅に迎えを寄越すという話だったが、それらしい人物と接触できずに、すでに予定時刻から２０分。

「住所わかってるし、勝手に行くか……？」

迎えと行き違いになることを気にしつつも、バス停へ向かおうとした時。

「止まって止まって～～～！？」

オートバイが駅前のロータリーに入ってきたのが、嫌でも目についた。

スクーターではなく、本格的なオフロードタイプのオートバイに乗っているのは、学生服のままという根性の入った（というか運転

には危険な）格好の女子学生。
そのオートバイはブレーキもかけずに、猛スピードで十路の方へと突進して――
「どいてくださぁぁぁぁい！」
「って！？　おい！　こっち来るのかよ！？」
衝突する、と思った直後、盛大なスキール音と共にフルブレーキ。
「きゃぁ！？」
その勢いで乗ってた女の子は、オートバイから放り出されて縦に半回転。
逃げるには間に合わない。十路は飛んでくる女の子を受け止めようとして。
「の〝――っ！？」
視界いっぱいのパステルカラーと一緒に、尾骨の直撃を顔面に食らって吹っ飛んだ。
◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
相手が女の子とはいえ、全体重をかけたヒップアタックの威力は並ではなかった。
「やっと鼻血が止まった……」
鼻につめたティッシュを交換しても、真っ赤に染まっていたが、ようやくそれもなくなった。

「ごめんなさい！　ごめんなさい！　本当にごめんなさい！」

その間、加害者となった女子学生は、頭を何度も下げ続けていた。

「念のため弁解しておくけど、興奮して鼻血出してたわけじゃないからな？」

「や、わかってます……」

そう言いながらも警戒するように、手は学生服のスカートに伸びて、裾を押さえている。

「わかってますけど……やっぱり、見えました……？」

「ヒップアタックを男の顔面に叩き込むのと、スカートの中を知られるの、果たしてどちらが恥ずかしいものなのだろうか」

「……中身を知られる方でしょうか」

「いや、一瞬の事でなにがなんだかわからなかったし、その直後の衝撃の方がものすごかったぞ……」

「そうですか……そうですよね……」

「ただ親切心で言わせてもらうと、今はいてるオレンジのチェック柄のパンツ、後ろに穴が開いてたから、換えた方がいいと思う」

「バッチリ見てるじゃないですかぁ！？」

会ったばかりの女の子に泣きそうな顔をされて、十路は『やはり言うのではなかった』と少し後悔。

「……不可抗力だけど、見たのは確かだから俺が悪かった。だけどそっちも単車（オート）を暴走させなければ、こんな事にはならなかった。お互いそれぞれ悪い部分がある。だからこれで相殺。以後忘れる。謝るのもなし。ＯＫ？」

「お、おーけぃです……」

一気に言われ、頭で考えるよりも前に、反射的にカクカクうなずいてしまう女子学生。

オートバイを『オート』と呼ぶ、聞き慣れない言い方にも、不自然に思う暇がなかった。

「それじゃあ、気をつけろよ」

体を張って受け止めた甲斐あって、女子学生にケガはなかったようだから、安心して予定通りにバス停に向かおうとして。

「堤さん？　どちらに行かれるんですか？」

その女子学生に呼び止められた。

「俺、名乗ったっけ？」

「……あ。自己紹介、してませんでしたね……」

鼻血を出していた間に確認していたのか、女子学生の手には携帯電話。

その液晶に十路の顔写真が写っている。

「えー……遅れた上に、ケガをさせてすみません」

とても言いずらそうに、そして気恥ずかしそうに、彼女は頭を下げる。

「修交館学院の理事長から、お迎えを言い付かった者です……」

「学生、だよな？」

「はい……高等部1年、木次樹里(きすきじゅり)です」

『迎えを寄越す』としか聞かされていなかった上、平日ならば、学校の職員が来るものと勝手に思っていたが、しかしやって来たのはオートバイを爆走させる2つ年下の女子高生。

改めてその姿を改める。

6月で1年生。衣替えをしたばかりで、まだ糊(のり)の効いた夏服に包まれているのは、特別背が高いわけでも低くもない、細身の体。

ミディアムボブの髪に収まった、人の良さそうな顔立ちは、なぜか犬を連想。それも愛玩用の小型室内犬ではなく、警察犬や災害救助犬のような、野性と知性を併(あわ)せ持つ大型種。

オートバイという要素がなければ、どこかにいそうな普通の女の子。騒がれるほどではないが、男子生徒の間で『ちょっと気になる女子』の地位を確立していそうな印象。

「え〜〜〜……早速ですけど、堤さん」

先ほど以上に言いにくそうに、木次樹里(きすきじゅり)と名乗った少女が、申し訳なさそうに口を開く。

「バイクの免許、持ってます……？」

「なぁ……木次(きすき)、さん？　質問に質問を返して申し訳ないけどな？」

初対面で呼び捨てはまずかろうと、一応『さん』付けはして丁寧な口調にしたもの、十路は半眼で、すでに目が泳いでいる樹里の顔を覗き込む。

「まさか免許を持ってない？」

「……動かし方は知ってるんですけどね……」

「うぉい！？　最悪だな！？　無免許運転かよ！？」

「私だって意味わかんないですよぉ！　でもあれに乗って行けってつばめ先生がぁ！」
「……おけ。わかった。了解。意味は全然わからないけど、問い詰めても仕方ないってのはわかった」

つまり、その『つばめ先生』とやらは、十路が免許を持っているのを織り込み済みで、樹里をオートバイに乗せて行かせたということ。
それでも無免許運転を実行するのはどうかと思うが、もはや遅い。

「俺の分のメットは？」
「大丈夫です。用意してます」
「だったら問題ない――」

そう言って、路肩に駐車されているオートバイの方を振り返って。

「……？」

十路の眉根が軽く寄る。
デュアルパーパスと呼ばれる、未整地も市街地も走れる汎用・中型のオートバイ。
しかしメーカーカタログでは見たことのない形状。
この手のタイプはエンジンが露出してるものだが、これは機関部までボディに覆われている上、通常車体右側についているマフラーが、目立たないように後部と半一体化している。
鼻血もようやく止まり、手に付いた血は渇いてるが、それでも気をつけて赤と黒でペイントされたボディにも触れる。
新車らしい、ひとつの傷もないそれが、普通の素材とは違うことを確認。
触れたそこには”Ｂａｒｇｅｓｔ”とロゴタイプ。どうやらそれ

が、この車体につけられた名前らしい。

「……堤さん？」

不審げな樹里には構わず、十路はフロントに埋め込まれたメーター部分をノックしてみる。

しかし当然、なにも起こらない。

仕方がないといった顔をした十路は、車体後部横に追加されていたアタッチメント、その左側に、ずっと持っていたケースを載せると。

ガチリと音を立てて固定された。

「え……？　そのケース……？」

「なるほど……まさかこんなところで、コイツにお目にかかるとは思わなかった」

それはビジネスマンが持ち歩くアタッシェケースではなく、積載量が少ないオートバイに追加する、パニアケースと呼ばれる収納用追加パーツ。

「バーゲストって、なにから付けた名前なんだ？」

「確かイギリスの昔話に出てくる、犬の姿をした魔物だったと……」

「行儀の悪そうな犬だな……？」

これに乗るだけなら、免許は必要ないのかもしれないが、十路もそこまで道路交通法に詳しくなかった。

００＿０３０　ＰＭ１５：４９　修交館学院（前書き）

・検証：場所の実在性

とは言っても完全に同じではなく、中途ハンパにフィクションというのも自分でとうかと思うものの。

００_０３０　ＰＭ１５：４９　修交館学院

神戸は山と海に挟まれ、古くは街道の要所として、そして港町として存在していた。
それが江戸時代の終わりと共に、国際港として開かれて以来、急速に都市として栄えた。
古くから存在する日本文化と、外から入ってきた西洋文化が同居し、しかも昭和に時代が移ると、阪神工業地帯の中核として、重工業と化学工業が発展。
海を埋め立て人工島を作り、海上空港を作り、技術的な試みが行われた過去もある。
そしてそれに携わる人々のベッドタウンとしての一面も存在する。
新旧取り混ぜて、さまざまな要素が混じった場所。それが神戸。

そんな土地に３０年前、また新たな要素が入った。
それが《魔法》。
全世界２１ヶ所のひとつ、淡路島に突如巨大な『塔』が出現したと同時に、《魔法》という未知のモノが現れた。
住人は便宜が図られ移住させられ、あらゆる交通手段が排除され、現在の淡路島は国際機関に管理されて、人の出入りは容易にできない。
世界的にも珍しい、《魔法》の発生源に一番近い主要都市である神戸が、《魔法》の研究都市として発展し、さまざまな分野の企業や研究機関がそれを解明・利用するために、この地に集まっている。
「……こういう観光案内的説明はいりませんか？」
高台にある新神戸駅から坂道を下るオートバイ。そのリアシート

に座る樹里が、運転する十路に問いかける。
十路のものはフルフェイス、樹里のものはジェットタイプ（十スポーツゴーグル）、２人のヘルメットには小型の無線機が仕込まれているため、走行中のエンジン音の中でも会話できる。
人懐こそうな印象を裏切らず、樹里は初対面の十路にもあれこれ話しかける。

「その辺はなんとなしには知ってる」
「『塔』に関しては、どこの小学校でも習うことですしね」
「それより木次（きすき）さん……制服のままで２人乗（タンデム）りするの、どうかと思う」
「や、着替えないですし……」

樹里の着ている制服は、膝上１０ｃｍほどのミニスカート。６０ｋｍ／ｈの走行で、裾がパタパタ音を立ててはためいているので、十路としてはやはり心配になる。
しかし、免許はなくて運転もできなくてもオートバイ自体には慣れているのか、樹里はスカートを片手で押さえながらでも、危なげなくリアシートに収まっている。

「せめてブルマー履いてくれ」
「ウチの指定体操服はハーフパンツです」
「じゃあ、それでいいから履くべきだと思う」
「や～……スカートの下から出てると、カッコ悪そうで……」
「ファッションとパンツ全開になるの、どっちがマシ？」
「それならファション優先です。スカートを押さえていれば問題ないわけですし」
「最近の女子高生は嘆（なげ）かわしい……」
「堤さんって、結構お固い人なんですね……」
「まぁ、昨日までお固い学校にいたからな」

「どちらの学校ですか？」
「……機会があったら話す」

街の案内も含んでいるのか、樹里の指示で神戸市の中心道路、国道線２号線を走る。
あっと言う間に通り過ぎる光景に、異質なものが目に付く。銀行の前には、見ればすぐわかるパトカーだけでなく、警察車両が数台停まり、封鎖線を作っていた。

「銀行強盗でもあったような雰囲気だな……？」
「全国ニュースになってたと思うんですけど」
「今日はずっとドタバタしてるし、ニュースも新聞も見てないんだ」

ニュースの内容か、簡単に樹里が説明する。
事件が起こったのは今朝５時前、シャッターや監視カメラと共に、店舗内のＡＴＭ１５台が破壊され、現金約１億７０００万円が盗まれる。
ＡＴＭは不正にこじ開けられると、現金に薬液を噴射して汚染させる機能があるが、これが起動しておらず、また犯行時間は監視カメラが壊されてから、警備員が到着する１５分以内に犯人は逃走している。
警察によると、現場近くから黒い車が逃走するのが目撃されていて、その行方を追っている。

「……その事件、ちょっと異常だろ？」
「はい、だから全国ニュースになったんです」
「《魔法》の研究都市っての関係あるのか？」
「や、今のところはなんとも……あ、そこ左折です」

不審には思っても、事件に直接関わることのない立場の２人。世

間の一般人の多くが抱く感想以上のものは持てず、十路は指示通りに運転する。
やがて坂道を登って行くと、山の中腹、六甲山のふもとにも言える土地に、団地のように詰め込まれた建物群が見えた。
学校法人修交館学院。
国内外問わず、世界で活躍できる優秀な人材の育成を謳い、幼稚園から大学までそろえた、今時では珍しい複合校。
その高等部の駐車場に、2人乗りのオートバイが駐車された。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「まだ新しい学校なんだな……」
「はい、築5年ほどですよ」

土地が土地だからか、どこかしら研究施設を連想する近代的な校舎を、樹里の案内で進んでいく。
教室はガラス張りで、廊下から簡単に授業の様子を見学することができる。
板書されてる内容から察するに、物理、現代国語、数学など、ごく普通の高等学校の内容で授業が行われている。
その中で目につくのは――

「留学生が多いな？」

自然なブラウンやレッドシュの髪を持つ生徒が、大抵どの教室にもいる。中には宗教上の理由か、民族衣装を身につけて席についている生徒も。

「海外からこの街に異動で、ご家族でいらっしゃる人も珍しくないですから、留学生さんが多いんです」

選択授業なのか、特別クラスなのか、留学生ばかりを集めて、日本語の授業をしている教室の前も通った。

「だから授業のスタイルも、他の学校とはちょっと違うと思います」

「英語圏の留学生に、英語の授業しても仕方ないだろうしな」

特別教室も案内され、実験室や音楽室、情報処理室や調理実習室など、どこの学校でもある、しかし新しい設備が入った教室も見学した。

校舎から見下ろすグラウンドでは、神戸の市街地と海をバックに、体育の授業でサッカーが行われている。

「堤さん、ウチの学校、どうですか？」

「まぁ、普通の学校？」

「あはは……どんな学校を想像されてたんですか……」

「《魔法》の研究都市にある学校なんだから、変な授業とか、設備があるのかと」

「や、ここにいるのは普通の人ですし、《魔法使い》は専門の学校に通うのが普通なんですから――」

苦笑と共に答えた樹里が、なにか気づいたようにハッとし、言葉を切った。

「ごめんなさい……堤さんは、事情があったんでしたね」

「聞いてるのか？」

「詳しくは知りませんけど、《魔法使い》だとは聞いてます」

昇降口を抜け、外に出る。

そしてそのまま別の建物に向かう樹里に、十路は大人しくついて

いく。

「珍しくないわけ？」
「なにがですか？」
「いや、俺は《魔法使い》だし」

数千万分の一の確率でしか発生しない人間。
《魔法使い》が集められる育成校にいた時は別として、素性が知られると過敏な反応が返ってくるのが十路の常だったが。

「いいえ？」

しかし樹里は、あっさり否定。

「こんな街ですから、何人か《魔法使い》がいますから、そこまで珍しいってわけでもないですから」
「学生に？」
「はい。それに――」

そして樹里は笑顔を浮かべた。

「私も《魔法使い》ですから」
「え？」

それには十路も驚きの声を上げる。
彼女からは、そういう『匂い』が全くしない。

「ここでは《魔法使い》も、普通の生活をしてるんですよ」
「……普通の生活って？」
「や、ごくフツーの生活ですけど？　普通に学校来て、普通に勉強

して、普通にご飯食べて、普通に友達と遊んで、普通に生活してますけど？」

それは十路の常識にはない環境。

《魔法使い》の生活は、国家的な保護と引き換えに、様々な制限がある。

おおよその進路は決まっており、公務員という選択肢以外を選ぶ自由はあまりない。海外旅行はビザが取れない場合もある。

十路個人の場合だと、完全寮制の育成校に通っていたため、もっと厳しく、外泊は基本的に不許可、敷地の外へ出る場合でも事前許可が必要で、帰った後にいつどこで誰と会い何をしたか学校へ報告する義務もあった。

「……どうして、こんな学校に俺が招致されたのか、理由がわからないんだよな……」

「……？」

怪訝な顔をした樹里がひとつの建物に案内した。

高等部の敷地を出て、大学部の敷地へと続く階段を昇ったその先、学校法人全体を管理している管理棟。

その一室、『理事長室』とプレートがかかった扉の前で止まった。

「多分、堤さんを招致したご本人に訊いてみるのが、一番だと思いますけど」

「そうだな」

そして分厚い扉をノックした。

００＿０４０　ＰＭ１６：１５　長久手つばめ（前書き）

伏線というか、ごまかしというか。
これちゃんと理解してもらえる文章になってるのか不安ですが。

00―040　PM16：15　長久手つばめ

「いやー！　よく来てくれたねー！」

重厚なオーク材を使った机の席に座る、この理事長室の主は、30歳に届くかどうかのスーツを着た女性だった。

「改めてはじめまして。修交館学院理事長、長久手（ながくて）つばめです」

「はぁ……はじめまして、堤十路です」

「うん、知ってる」

「そりゃそうでしょうね」

言葉だけ聞けば、とりあえずちゃんとした会話をしているのだが、実際は違う。

「つばめ先生……いい加減、ゲームはやめてください」

「あ〝ーーー！！」

この部屋に入って、なぜかエプロンをつけた樹里が、会話中もいじっていたスマートフォンを、つばめの手から取りあげた。

「がえ〝じでーーー！！　お〝がーーーざーーーん！！」

「誰がお母さんですか！　あとまたゲームで課金しまくらないでください！　電話代6ケタに突入したらケータイ取り上げるって言ったでしょう！」

「うぐ……！」

「いまお茶淹れますから、ちゃんと堤さんに説明してください」

「おやつは？」

「帰りがけにカステラ巻き買ってきました」

「わーい☆」
「おやつの時間には早いですから、ひとつだけですよ」
「えー……」

一介の生徒が学校最高責任者に、説教して、世話している。
その姿、さながらお母さん。

「あの、木次（きすき）、さん……？」
「ツッコミはなしでお願いします……」
「……了解」

そういう性格に見えない樹里が目上の相手に怒鳴り、やたらプライベートな会話をし、部屋の隅のティーセットでお茶を入れるのに慣れているのを詮索しようとしたが、先じて封じられた。
どうやら彼女にとって不本意なのが、顔色を見てうかがえた。

「それで、長久手（ながくて）理事長……どうして俺をこの学校に招致したんですか？」

応接セットに移動して口火を切ると、樹里が淹れたお茶が前に置かれた。

「ん～、なにから説明しようかな」
「じゃあ、３つだけ質問しますから、イエスかノーで答えてください」

エプロンをつけたまま、樹里もつばめの隣の席に座る。普通ならいち学生が一緒に話を聞くものではないが、それをつばめは止めはしない。

「俺が《魔法使い》なのと関係がありますか？」
「イエスだね」
「俺が通っていた学校と、なにか話し合いがありましたか？」
「それもイエス」
「俺になにかさせようとしていますか？」
「一応だけど、イエスだね」
「そうですか」

それだけ聞けば十分とばかりに、十路が席から立ち上がった。

「え？　堤さん？」
「それでは俺はこれで失礼します」

驚く樹里は無視し、軽く一礼し、十路はそのまま部屋を出ようとしたが。

「別にいいけど、これからどうするの？」

つばめの言葉で、扉のノブに手をかけたところで、動きが止まった。

「《魔法使い》は色々大変だよ？」
「……」

十路が振りかえると、つばめはこちらを見ないまま、涼しい顔でお茶を飲んでいた。

「トージくんが《魔法》の使えない、出来損ないであってもね」
「え……？」

樹里が驚きの声を上げ、十路の顔を見てくる。
《魔法》の使えない《魔法使い》なんて、聞いたことがないから。
「堤さん。《魔法》が使えないって、本当なんですか？」
「まぁ……な」
「つばめ先生。まさかとは思いますけど、部活のこと、全然お話ししてないんですか？」
「まぁね～」
「やっぱり……なにか変だと思ったら……」
つばめは素知らぬ顔で、お茶請けの菓子をほうばり始める。
「部活って、なんのことですか？」
「ふぉれがキミをこのガッコーにしょうひしたリユーらよ」
手でソファに指し示され、座るよう促されたが、口の中に菓子が入ったままでなにを言ったかわからなかったので、十路は視線で樹里に続きを促す。
「……つばめ先生が顧問で、私も部員なんですけど、この学院には、特殊な部活動があるんです。堤さんがこの学校に招致されたのは、その部活に入部する事が条件だと思います」
「どういう部活？」
「《魔法使い》として、誰かの願いを叶える……という部活です」
「……は？」
馬鹿げている。
「願いを叶えるって……？」
「だって《魔法使い》は、誰かの願いを叶えるのが本業じゃないで

すか」

物語に描かれる『魔法使い』は、確かにそういう役割の者がいる。しかし現代社会に生きる《魔法使い》は、そんな存在ではない。

「大体、そんな簡単に《魔法》が使えるはずないだろ？」

「ここは実験都市ですから、普通の人と《魔法》の関わりの検証実験という名目で、特例として許されてるんです……まぁ、かなりの裏技ですけど」

「『杖』は？」

「それも特例で、私たちは自分専用のものを持ってるんです」

存在自体は周知のものとはいえ、一般人が《魔法》と携わることは普通ありえない。

しかしどうやら冗談ではなく、樹里の言葉は本当であることを理解して、十路は絶句する。

その方法はなくはない。《魔法使い》ではない普通の人間たちが作った決まりの中で、不可能ではないと、十路も理解はできる。

だが、普通はそんなことを実行しようと考える人間はいない。

「……部の名前は？」

「……都市防衛部といいます」

「……とりあえず3つ、ツッコミたい」

「想像できる第1のツッコミに返すと、この名前をつけたのは、つばめ先生です……」

中ニ臭の漂うセンスはこの人か、と菓子をほうばるつばめを横目で見やる。

「第2に、要はなんでも屋です……」

過激なチーム名でも活動内容は町内探検だったりする、小学生レベルのセンスだと認識を改めた。

「第3に、名前だけでなく、内容にもあまり《魔法》要素はありません……」

最近はサンタクロースを信じない、夢のない幼稚園児も増えてるらしい、と、センス以前の現実を考えさせられてしまう。

そして樹里がツッコミを的確に予想したわけではなく、同じことを誰もが訊くのだろうと思うと、複雑な気持ちになる。

「入部した感想は……？」

「あはは～……一言で表すと、人生の転換期ですね～……」

「悪かった。訊いてはいけないことを訊いてしまったらしいな……」

しかし、目を泳がせる樹里を見る限り、後悔はしているようだが、退部する意思は感じられない。

そうなると考えられるのは、樹里も十路同様に、交換条件の義務として入部しているか、それとも不利益以上の利益があるかのどちらか。

口の中を茶で洗い流し、つばめが会話に加わる。

「――どう？　転入して、入部してくれない？　ここでの生活の一切を、こっちで面倒見るし、途中で辞めるのも自由だから、悪い条件じゃないと思うけど？」

部の名前や活動内容はともかく、ただの条件と捉えれば、破格の好条件。

しかし、ただの交換条件だと理解している。
「そっちのメリットは……？」
だから、どんな無理を吹っかけられるか、十路は警戒する。
「ぶっちゃけ、人数が足りなくて廃部の危機」
「は？」
「5人以上の部員が必要なんだけど、防衛部は、ジュリちゃんとも
う1人しか部員がいないんだよね」
「この学校の最高責任者はあなたですよね？　それで、理事長が顧
問ですよね？　なのに廃部の危機？」
「組織のトップが率先して決まり破っちゃいけないでしょぉ？」
「……ビミョーに恥ずかしい名前変えたら、入部希望者来るんじゃ
ないです？」
「それはイヤ」
「だったらムリでしょうね……」
嘘をついていると考えるほどではないが、交換条件が余りにも小
さいものだから、つばめが口にしていない事情があると疑う。
この招致の話はあまりにも怪しすぎる。
しかし――
「入部すれば、トージくんの望みも、叶うかもしれない」
「俺は、出来損ないの《魔法使い》ですよ？」
「それでも、だよ」
「……」
つばめの言葉に、十路の心が揺れ動いた。
それが絶対に叶うはずのない願いでも。

つばめの笑みが悪魔のそれに見えても。

００＿０５０　ＰＭ１６：３２　都市防衛部（前書き）

ほぼ設定説明です。

00―050　PM16：32　都市防衛部

チャイムが鳴り響き、校舎から生徒たちが出てくる。
理事長室で『荷物』を受け取った樹里を追いかけ、私服姿で十路がオートバイを押しながら歩くと、その中では浮いているが、一瞥される以上は注目されない。
放課後の学生たちは忙しく、学外の人間が敷地内にいても、不審人物扱いされるほどでもないのだろうか。
樹里が長くて奇妙な棒を持ち歩いていても、特別注目されているわけではない。

「ここがウチの部室です」

連れてこられたのは、高等部の校舎の裏手。外からぐるっと回らないと来れない、平屋の建物。
電動シャッターのスイッチを入れ、上がりきるのを待たずに入る樹里が、十路を中へと誘う。

「ガレージのくせに、えらく生活感溢(あふ)れてるな……」
「やー……つばめ先生いわく、部室棟に空きがなくて、融通できるのはここだけだったそうで……」

元はマイクロバスのガレージだったのか、普通車が縦に2台は置けるスペースに、パソコンが乗ったスチールデスク、ソファセットにティーテーブルに冷蔵庫。粗大ゴミ置き場から拾ってきたような古びた家具が置かれている。
壁は本棚とラックで埋め尽くされ、背表紙からして難しそうな内容の本はあるが、ほとんどはマンガや小説、ゲームのパッケージや映画のＤＶＤといった娯楽品。あとは中身の知れないダンボール箱。

このスペースを見る限り、《魔法使い》とは一見無縁。最近の子供はそういうものを作らないかもしれないが、秘密基地を連想する空間。

「でも、新しくオートバイを備品として用意したってことは、元々ここしか使わせないつもりだったのかもしれませんね」

持っていた長い棒を、無造作に壁に立てかけた樹里が、隅の冷蔵庫から麦茶をコップ2つに入れる。

「前々から備品として予定されてたんじゃないのか？」

空きスペースにオートバイを駐車させ、十路はガレージ内を歩きまわり、ダンボール箱を軽く叩いて中の感触を調べる。

「そのバイク、お昼までありませんでしたから、堤さん用に用意したものだと思うんです」

「なんとまぁ……転入も入部も未確定なのに、そこまで前もって……」

「つばめ先生、それだけ堤さんが入部することに、期待してるってことじゃないです？」

「いや、違う。初期投資をあからさまにして、俺が断りにくいようにしてる。要するにハメようとしてるだけ」

「あはは……確かに計算高い面はありますけど、信用できる人ですよ」

「悪いけど、俺は初対面だから、木次（きすき）さんほど信用できない」

結局、転入の話は保留した。

全寮制の学校を退学させられて、今夜の寝る場所もない十路にとっては、魅力的な話ではあるが、信用するには危機を感じる。

だから部員である樹里から、もう少し話を聞きたく、場所を移すことになった。

「その部活、ヤバいんじゃないのか？」

「やー……基本的には、理事長室でお話した通り、なんでも屋さんですよ？」

「《魔法使い》が願いを叶える……それだけ聞くと、正にファンタジーだな」

手でソファにどうぞと示す樹里に、片手を上げて感謝を伝えるが、なぜか座らずソファのクッションを上げてその下を調べる。

「だけど《魔法》を使えない《魔法使い》は、お呼びじゃないだろ」

「や、使えないよりは使えた方がいいですけど、重要なのは、そこじゃないんです」

「違う？」

這いつくばるように家具の裏側を覗きこんでいた十路が、驚きの目で樹里に振り返る。

「大事なのは、自分が叶えたい望みがあるかどうかで、部員は《魔法》の使えない普通の人でもいいんですよ」

「自分の叶えたい願い……」

堤十路には、それがある。

「木次（きすき）さんにも、それがあるから入部したのか？」

「そうですけど……内容は訊かないでくださいね？　部則で禁止されてますから」

「規則がちゃんとあるんだ？」

「『《魔法》を悪用しない』『自主性に責任を持つ』『部員の事情を詮索しない』『学生らしくあれ』」
「……は？　それだけ？　たった４つ？」
「はい、それだけです」
「……？」

最初は理解できる。
《魔法》という能力を、犯罪という短絡的な方法に使わないために、最低限の戒（いまし）めは必要。
問題は残りの３つ。
《魔法使い》なんて得体の知れない人間を詮索しないことはありえないし、《魔法》という異能を持つ人種には義務が生じ、『自主性』という言葉は無縁なことが多い。
そして学生相手に、わざわざ『学生らしく』なんて改めて言うことでもない。
加えて、貴重な人的財産である《魔法使い》は、保護の名目でなにかと制限が多い人種。
重要なことを口頭だけで注意、しかも破った場合の罰則を定めていないなど、普通はありえない。

「私も、もう１人の部員も、自分の望みを叶えるために、この部活に入部してます。ですけどお互い、その内容を詳しくは知りません」
「『事情を詮索しない』って項目か」
「どちらかと言えば『自主性に責任を持つ』の方ですね。人の心に踏み込む責任は、私じゃ取れないかもしれませんから」
「なるほど……」
「堤さんの望みだって、気軽に訊かれてもイヤでしょう？」
「……いや、俺のは簡単」

膝をコンクリートの地面についたので、ジーンズを払いながら、

なんでもない調子で。

「俺の望みは、普通に生きること」

「……はい？」

「とりあえず、退学させられて、衣食住を欠く状況なので、普通に生活できる程度はなんとかしないと」

「あのー……差し出がましいですけど、つばめ先生の話を了承すれば、それって叶うんじゃ……？」

「ん、まぁ、そうなんだけど……」

転入と入部の条件は、話が美味すぎて怪しい。

加えて、やはり躊躇してしまう理由がある。

十路の望みが『普通に生きる』ということは、これまでは普通に生きていないということだから。

「ところで……さっきからなにしてるんですか？」

「大したことじゃないから、気にしないでくれ」

「や、気になるんですけど……」

十路はずっとなにかを落し物を探すように、家具の隙間にも手を入れて探っていた。

物を動かすのは遠慮したようだが、床から天井まで、目が届く範囲は全て調べようとしている。

「さすがに見ただけでわかるような物はないか……どうだー？　なにか変な電波出てないかー？」

「はい？　電波？」

「あぁ、違う。木次（きすき）さんに言ったんじゃない」

「？」

この部室には、人間は2人しかしかいないのだから、樹里を否定すれば、返事をする者はいない。
しかし反応がないのが否定の反応と、十路は判断。
（盗聴器や隠しカメラの類はないのか……意外だな）
拍子抜けした顔をして、十路は改めて、部屋の隅に視線をやる。
「で、俺も訊きたいんだけど、木次さんの『杖』、あんな風に扱ってていいのか？」
理事長室で樹里がつばめから受け取り、部室の壁に立てかけてある物。
長さは2mほどの長大なもので、電子部品のような無骨な先端を持つ、一見子供の自由な発想で作られたガラクタにも見える棒。女の子の持ち物らしく、先端部近くの柄に小さなヌイグルミやストラップがつけられ、それに混じって『防衛部備品　E－W－S』という文字と、管理番号と思われる数字が書かれているプラスティックカードがぶら下がっている。
『杖』と呼ぶには長すぎるが、それでも十路はそれを『杖』と呼んだ。
「や、アビスツールの扱い、いつもあんな感じですよ？」
それは現代社会に生きる《魔法使い》が必須とする『魔法使いの杖』だから。
「念のために訊くけど、《＞魔法使いの杖―アビスツール＜》の値段、知ってるのか？」
「や～、実は具体的には知らなくて……」

「標準的なものなら飛行機が買える」
「……セスナ機ですか？」
「ジャンボ機。参考までに、政府専用機の価格は１８０億円くらい。最新鋭旅客機だともっと高い」
「え゛」
「本当に知らないんだな……」
「や、だって防衛部に入部した時、『これ使え』って、普通に渡されたので……」
「ゲームでは考えられない超高額初期装備……」
「これからは大事に扱います……」
「というか、《魔法使い》なら知っていような？」
「はい……」

怒られた犬のように、しょんぼりして長杖を抱える樹里に、十路は改めて疑問を覚える。

（この娘、本当に《魔法使い》か……？）

自ら《魔法使い》だと名乗った時から、疑問に思っていたが、それらしくない。
十路が知る《魔法使い》たちは、ある意味では純粋であったが、目の前の女子高生のような、どこか抜けている純粋さではなかった。

「厳重管理してるんだろうな？」
「してます！　いつもはつばめ先生がちゃんと管理してる……はずです……多分……」
「オイ……」
「や、普段どこでどう管理してるのか、知らなくて……」

理事長室で手渡されたのだから、管理は顧問のつばめがしている

のだろうが、エーカゲンな性格がうかがえる理事長に、樹里も十路も不安になる。
《魔法使い》が《魔法》を使うのは、現代社会では大きな制限がかけられており、普段の管理も猟銃などとは比べ物にならない厳重さを、法律で定められている。
だから、十路は思ってしまう。

（大丈夫か、この部活……？）

入部した途端、国家権力が絡むような、とんでもない厄介に巻き込まれそうな予感。

００_０５０　ＰＭ１６：３２　都市防衛部（後書き）

１／５　脱字修正

００＿０５５　ＰＭ１６：３３　インターミッション０２（前書き）

今回はちゃんとインターミッション。
シリアス成分挿入？

００―０５５　ＰＭ１６：３３　インターミッション０２

「探したぞ……」

神戸市郊外、今は事務所も店舗も入っていない、荒れた雑居ビルの一室。

中身が入った麻袋が２つ、部屋が転がって以外、部屋の中にはなにもない。

「面倒を起こしてくれたな……？」

黒ずくめの男が、気だるげに日本語で語りかける。

黒いライダースーツに、濃い色の入ったシールドのフルフェイスヘルメット。日中でこの格好はかなり怪しいが、人目は目の前の男以外にいないので問題ない。

身長は１７０ｃｍを少し超えたところ、声の雰囲気からすると若い男、体にフィットしたスーツのラインから、それなりに鍛えているのはわかるが、それ以上の情報は得られない。

「どーゆーつもりだ、アイマン」

「……放ってオイてくだサイ」

『アイマン』と呼ばれた相手の男は、まだ１０代半ばと思えるアジア系の顔立ち。服装には変哲なく、浅黒い肌は、１７５ｃｍほどの筋肉質な体と相まって、日本人ボディビルダーと言えば通用しそうだが、なにより言葉のイントネーションが明らかに違う。

彼は奇妙な荷物を持っている。

金属の塊。１ｍを超える棒状のものだとはわかるが、火事場から拾ったように破損がひどく、元の形状が想像できない。

そんなガラクタにしか見えないものを、アイマンは大事そうに抱えていた。

「アナタ、私と、もう関係ナイ」

「まぁそうだな。俺もお前も使いっぱしりだし、大事なことは知らされていないから、お前がなにをしようと、関係性を疑われることはないだろう」

黒ずくめの男が、グローブに包まれた手で、首筋をポリポリとかく。『困ったな』とでも言うように。

「だけど状況は把握しておきたいんでな。後で痛い目みたくないから、俺は平和な時間を割いて、お前を探してたんだ」

「……修理しマス」

アイマンは抱えた金属の塊を示す。

「あぁ、お前を解雇（クビ）する時に、ぶっ壊しちまったヤツか」

黒い男としては挑発のつもりはなく、ただの事実確認で言っただけだが、その一言でアイマンの目付きが変わり、手にした金属の塊を男に向けた。

人を射殺せそうな視線だが、それを受けても態度は変わらない。

「よせよせ。お前じゃ俺を殺（や）れねぇから」

「――っ」

その言葉は真実なのだろう、眼光は弱まりはしないが、悔しそうにアイマンは小さく舌打ちする。

「で、なにする気だ？　『それ』を新しく手に入れようにも、お前が盗んだ金額じゃ、とても足らないぞ」
「……コの人に頼みマス」

ズボンのポケットから、アイマンは写真を取り出して見せる。
写っているのは、見目麗しい金髪碧眼の女性。日本人の感覚なら、年齢は２０歳を超えている。穏やかな微笑みを浮かべ、しかし凛とした空気を放っている。隠し撮りされたものではなく、被写体の女性はカメラを向けることに慣れてるらしい、視線を向けている。
それを見て黒い男は、ヘルメットの中で人知れず顔をしかめた。

「今、トウキョウにいるケド、今日帰ルと聞きマシタ」
「……その女は、確かにそいつを修理できる腕を持っている。だけど、止めた方がいい」
「アナタ、ジャマしまスカ？」
「……そのつもりだったが、やめた。どうやらお前は知らないらしいからな」
「……？　どういうコとデスカ？」
「そこまでは教えてやる義理はない」

黒い男が冷たく拒否した時、外が賑やかになる気配が室内に届いた。

「仲間か？」
「ハイ、手伝ってモラいマス」

部屋の扉が開かれて、談笑しながら入ってきたのは、アイマンと同郷と思える者たち１１人。その多くはアイマンと変わらない年頃。
緩んだ空気が黒い男を見た途端、一瞬で緊張して、荒くれ物のものに変わる。

しかし、アイマンが知らぬ言語で声をかけると、警戒を残しつつも、とりあえず納得はしたらしい。敵対しようとするのは止めた。
そしてアイマンは、部屋の隅に置かれていたズタ袋を男たちの前に放りだした。
重そうなその中身を見て、男たちが口笛を吹いて狂喜する。
（盗んだ金を１２人で頭割りしても、連中の国なら１０年やそこらは平気で遊べるだろうからな……）
部屋の隅に置かれた、もうひとつの麻袋の中身を推測。
（どこのヤツから仕入れたのか知らないが、あの程度の銃火器（オモチャ）なら、高くても２０００万もあれば揃うだろうし……）
しかし、と黒い男はヘルメットの中で思う。
（どうやってそれだけの大金を換金する気だ？　マトモな手段じゃ疑われるだろ……）
裏社会の人間として生きるには、アイマンは知らないことが多すぎる。
これも忠告する気はない。やはり解雇されるべき人間であったと、黒い男は改めて納得した。
「アイマン、様子は見させてもらうが、止めはしない。俺たちにまで厄介が及ぶようなら、しゃしゃり出るが、この調子だとそうならないだろう」
騒いでいた男たちが一斉に目を向けてくる。
しかしそれに構わず黒い男は、部屋の出口へ歩く。

「じゃあな」
「オ世話になりマシタ」
言葉を交わして、黒ずくめの男はビルを出た。

００＿０６０　ＰＭ１６：４５　防衛部の活動（前書き）

中途半端な日常会話。
日常会話を強めた方がいいのか、あるいはバッサリ切り捨てるかした方がいいような気はしないでもないが、試験的にこれで投稿。

00_060　PM16：45　防衛部の活動

都市防衛部の部室には、意外と来客が多い。
それが堤十路（つつみとおじ）の感想。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

最初に来たのは、30代と思える男性。

「――最近、妻が冷たいんだ……」
「あのー……先生？　それは私に言われても困るんですけど……」

高等部の教員だった。

「『魔法』でなんとかできないか？」
「や、そんなのムリですから、ご夫婦で話し合うのが一番かと……」
「教師の仕事って忙しいんだ……」
「はぁ……」
「毎日帰りは遅いし、部活の顧問やってると土日も休めないし……」
「はぁ……」
「それを承知で結婚してくれたと思ったのに……」
「や、そうだとしても、やっぱりガマンの限界があると思うんです……」

飲み屋でのグチを連想する空気に、視線で十路に助けを求めてくる樹里。
こんな悩み（しかも立派な大人の）にアドバイスできるほど、十路も人生経験豊富ではないが、樹里の意見と合わせて『花束でも持

って早く帰って一緒に食事しろ』という結論に至った。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

次に来たのは、高等部の男子学生。

「樹里ちゃ～ん」
「すみません先輩、今日はここに居座らないでください」
「冷たいっ！？」

樹里から『先輩』ならば上級生だが、どうやら顔見知りらしい。

「や、今日は案内中なので、困るんです」
「どーも。案内受けてる人間です」
「……」

軽く挨拶すると、その男子学生は十路の顔をじっと見る。

「……なんですか？」
「お前とは、なぜか気が合いそうだ」
「……前世でお会いしましたか？」
「違う。そういう意味じゃない」
「だったら？」
「今、ロシア美女が熱いと思いますか？」
「いや……特には」
「……やはりお前とは仲良くできそうだ」
「意味わかんねー……」
「また会おう！　アデュー！」

一見するとモテそうな男子学生、謎のイイ笑顔を残し、遠ざかる。

その背中を指差し、十路は樹里にゆっくりと振り返る。

「……バカ？」

「……」

樹里は否定しなかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

3番目に来たのは、高等部の女子学生。それほど親しいわけではなさそうだが、どうやら樹里の同級生らしい。

「水野さん、どうしました？」

「えぇと……木次（きすき）さんだけ？」

「あ、部長は今日いないんです。私でよければご相談に乗りますけど？」

「でしたら、お願いしたいですけど……」

その女子学生は、気まずげに十路を見てくる。

「……あ。俺、席を外しとくから」

「すみません、堤さん」

どうやら十路がいたら話せないらしいと気づき、部室の外に出て離れて様子を窺う。

水野と呼ばれた女子学生本人は、深刻そうに話しているが、樹里は微笑して、ときおり頷いているから、実際はそこまでないのだろう。恋愛相談やその他の『女の子の悩み』だと、十路は推測した。

「頑張ってください！」

「はい……」

内容はわからないが、意外と短時間で終了。どうやら樹里でも大丈夫だったらしい。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

ちなみに、客が来ない間はと言うと。

「……」

樹里は高校生らしく、部室に置きっぱなしのティーンズ雑誌を読み始めた。

「……」

仕方ないので十路も、本棚に詰めてあるマンガを手に取って読み始める。

「……」
「……」
「……」
「……」

部室の中に流れる、なんとも言えない時間。ページをめくる音と、遠くから聞こえてくる運動部の掛け声だけが届く。

樹里はあまり気にしてない。十路はなんとなく気まずい。

「あ、堤さん、麦茶おかわり淹れましょうか？」
「あぁ……頼む……」

冷蔵庫を開け、麦茶を注ぐ音が新たに響く。
そしてソファに座る十路の前に、コップが置かれる。

「どうぞ」
「さんきゅ」
「……」
「……」

そしてまた、お互い無言でページをめくる。

「……なぁ、木次(きすき)さん」
「はい？」
「会話のない家庭に育ったのか？　両親の夫婦仲、倦怠期だったのを目の当たりにしたのか？」
「……はい？」
「いや、なんでもない……」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

理事長室で話を聞いて、予想をしていたつもりだが、それ以上にショボイ内容。

「ここはカウンセリングルームか休憩室？」
「……否定できませんね。いろんな相談を持ちかけられますし」
「しかしまぁ、よく部外者が来るな？」

内容にもよるだろうが、相談事なんて普通、よほど親しい間柄でないとできない。

「木次さんは人望あるんだな」
「いえいえ、人望があるのはこの部の部長で、私はそのオマケです」
「ふん？」

たった2人の防衛部員。樹里を除く残るもう1人。
話の合間にたびたび出てくるが、どんな人物像なのかは、全く出てこない。

「どんな人？」
「……一言で説明するのは難しい人ですね」
「まぁ、俺の経験上、《魔法使い》は奇人変人が多いしな」

十路の脳裏に、よくある偏屈そうな老人の魔法使いが思い浮かぶ。
部員なら学生だろうから、その想像が変だとは理解しているのだが、テンプレートとして。

「誤解されないように言っておきますけど、いい人ですよ？　取っ付きにくいところありますけど、誰にでも親切で面倒見いい人ですから、こうして相談事が持ちかけられるんです」
「ふん？」

どうも樹里はお人好しな印象があるので、十路は話半分で受け取っておく。
都市防衛部――《魔法使い》のいる部の代表が、とても普通の人間だとは思えない。樹里のようなタイプの方が《魔法使い》には珍しい。

「私の口からお話しても、多分上手く伝えられないので、実際に会ってお話しするのが一番だと思います」
「その部長は？」

「用事があるらしくて、今日は部室に来れないと思います」
ならば話せないし、しかも転入を断ったら会う機会も今度ないだろう。
十路は軽く肩をすくめて、その話を終わらせた時。
「ねーちゃん！」
小学生だろう、元気の良さそうな男の子が、息せき切って部室に飛び込んできた。
「来て！」
「どうしたの？」
「イオリがジャングルジムから落ちた！」
言葉足らずな会話だが、それで通じたらしい。
顔つきを改めて立ち上がり、樹里は壁に立てかけた《魔法使いの杖（アビスツール）》を手にする。
「どこ！？」
「校庭！」
それだけ聞いて、樹里は外に駆け出した。
「あ、おい！」
止める間も、詳しく聞く間もなかったので、十路も樹里を追い、高等部校舎の裏を全力疾走。

００＿０７０　ＰＭ１７：２１　修交館学院初等部にて（前書き）

またも伏線投入。
いつ回収することになるのやら。

００―０７０　ＰＭ１７：２１　修交館学院初等部にて

１分後には２人とも、初等部のグラウンドに到着。
高等部の校庭とは違い、設置されている遊具、そのジャングルジムの近くに子供たちが数人、固まっている。

「どいて！」

どうすればいいかわからず、心配そうに見下ろす子供たちの輪を割り、その中心、地面に倒れて泣き叫ぶ女の子の側に樹里が膝をつく。

「木次（きすき）！　動かすな！」

２秒ほど遅れて十路も近づく。

「折れてる……」
「左腕からジャングルジムを落ちたんだろう。頭を打ってるかもしれない」
「回路展開」

樹里が手にした《魔法使いの杖（アビスツール）》の先端が一瞬だけ発光。
少女の全身を取り囲むように、そして左の二の腕、関節がないのに曲がっている位置に、腕を取り囲むように光る幾何学模様を形作られる。
ＥＣ―Ｓｉｒｃｉｔ。現代の魔法を行使する際に現れる『魔法陣』で診察。

「頭は……大丈夫。単純骨折だね。キレイに折れてるから、接合だ

けで十分」

ひとりごとを呟き、念じるように樹里がまぶたを閉じる。

「実行」

たった一言。

それで骨折部位を囲んでいた幾何学模様が、淡く光量を増し、不自然だった少女の左腕が元に戻る。

「医療魔法……」

初めて見るものではないが、十路は軽く驚く。

しかし、この手の魔法の使い手で、樹里のような若い者はまずいない。

人体の仕組みを理解するほどの知識、つまり医者になるのと変わらない勉強が必要なのだから。

「うん。完了」

満足そうに頷き、長杖を軽く振ると、幾何学模様（EC-Sircit）が消え失せた。

「ほーら、もう大丈夫だよー。それともまだ痛い？」

地面に寝たまま泣いていた少女を抱き起し、樹里が笑いかける。

どうやらこういう光景は、初めてではないらしい。心配そうに見ていた周囲の子供たちは、ほっとしたように顔をほころばせるだけで、驚いた様子はない。

無造作に人前で《魔法》を使ったというのに。

それも十路には驚きというか、不思議であったが、なによりも不

思議に思っていたことに、一つの結論が出た。
「木次さんって、本当に《魔法使い》だったんだな」
「信じてなかったんですか！？」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「や～、大したことなくて、よかったです」
ジャングルジムから落下し、骨折した少女の治療を終え、樹里は部室に帰って来た。
「……」
眉根に皺を作る十路を連れて。
「あのー……堤さん？　さっきからどうしたんですか？」
「……」
訊ねても十路は返事しない。
またも壁に立てかけた、樹里の《魔法使いの杖（アビスツール）》をジッと見て、微動だしない。
「堤さーん……？」
反応しない十路の背後に近付き呼びかけた、その途端。
ほんの少しの衝撃と共に、体が軽く落下した。
「え？」
「あ！？」

樹里の声の意味は疑問。十路の声の意味は後悔。

「え？　え？　え？」

自分になにが起こったのか、理解できず樹里は狼狽。理由不明で倒れかかった体、上体に回した十路の腕一本で支えられていた。

必然的に顔が体に近づき、今までは意識してなかった十路の匂いが鼻に届く。

（わっ……なんだか安心できる匂い……）

新陳代謝が活発な高校生男子の匂い、しかも夏が近づき汗が流れる梅雨の時期でも、不思議と不快な気持ちにはならない。

「……スマン」

「や、いえ……？」

そんなこと樹里が考えてるとは当然知らず、気まずげに無理矢理立たせ、怯えたように十路が距離を取る。

「俺の不注意だ……悪いクセが出た」

「癖？」

「前の学校で身についたクセ……」

背後に立った樹里を、反射的に足払いで地面に倒し、拳か蹴りを叩きこもうとして慌てて制止した。

とりあえずは何もなかったと、ため息をついて安心し、次もまたあるかもしれないと思うと、十路は暗澹たる気持ちになる。

「誰かれ構わず抱くクセですか……？」
「俺どんな犯罪者だよ！？」

しかし何も知らないというのは、ある意味幸い。的外れな回答に、暗い気分は吹き飛んだ。

「わからなかったら、それでいい……ともかく悪かった」
「はぁ……？　まぁ、いいですけど……」

奇しくも同時に、２人がそれぞれに同じ評価を下した。

（堤さんって、変わった人だなぁ……）
（＞木次―きすき＜って、変わった娘だな……）

十路への評価はそのままの意味で。樹里への評価は抜けているという意味で。

「それで、私の《魔法使いの杖（アビスツール）》がどうかしましたか？」
「あー……いや、いい。なんでもない。言おうかどうしようか迷ったけど、いま言うことでもないかと思って」
「？」

迷っていた雰囲気から、深刻な話をしたいのではないかと想像していたが、そう言われると訊き返せない樹里。

十路が考えていたのは、グラウンドで樹里が医療魔法を使った件。あんなに簡単に、人前で魔法を使うことを注意しようかとも思ったが、周囲の子供たちが驚いた様子もなかったので今更なのだろう。

そして『抱きつき癖』疑惑で、真面目な話をする気分でもなくなった。

だから話を変えた。

「あー……それでまぁ？　防衛部の活動って一通り見せてもらったってことになるのか？」
「まぁ、そうですね。どうでした？」
「……そうだなぁ」

活動内容はカウンセリングルーム。《魔法》を使う事があっても小さな治療程度。医療魔法は十路は使えないし、そもそも十路は《魔法》自体が使えない。
部活動としては存在理由が不明。《魔法使い》などという世界で一番面倒な人種を使うほどでもない。
こんな部活動の入部が、転入の条件にされる理由は、やはり不明。
そこまではプラスマイナスゼロの様相だが、自身への問題で、大きなマイナスだと十路は思う。
無意識の行動とはいえ、樹里を傷つけようとしたのが大きな精神的ダメージ。

「転入は、や――」
「おー、いたいた。ジュリちゃーん」

転入はやめよう、と宣言しようとしたが、部室につばめが入ってきたことで遮られた。

「まずコレ」
「？　なんです？　これ？」

つばめの手から渡されたのは、合金製のケース。今はオートバイの後部に積みっぱなしにしている、十路の荷物と同じ物に見える。

「ジュリちゃんのケース。今日からコレ使って」

「へ？」
「あとトージくん、お願いがあるんだけど」
「は？　俺もですか？」
「うん。トージくん、体験入部中でしょ？」
「まぁ、そうなりますけど……」
「ってことは、『部活』ですか？」
「うん。２人一緒の方が丁度よさそうだし」

樹里は部員として問題なくても、十路は現状では部外者。それでなにが丁度いいのか疑問だが。

「理事長……俺になにさせる気ですか？」

十路の問いに、つばめは笑みを浮かべる。
邪悪ではないが、イタズラ心を秘めた小悪魔の笑み。

「ある人を迎えに行って欲しいの」

００＿０８０　ＰＭ１７：５５　コゼット・ドゥ＝シャロンジェ（前書き）

検証事項の伏線追加。
いつになったら回収するのか我ながら不明。

00_080　PM17：55　コゼット・ドゥ＝シャロンジェ

坂道を下り、大通りを抜け、2人乗りのオートバイが橋を渡る。
新神戸駅から修交館学院までの道のりとは少し違い、今はオートバイの両サイドに、金属製のケースが乗せられている。
神戸市中央区港島。六甲山の土に埋め立て人作り上げた島、ポートアイランド。
過去には医療関係　淡路島の『塔』と《魔法》が現れた以後は《魔法》に関わる研究施設や企業が、この場所に集結している。
もちろん普通の公共施設や住居、店舗も存在しているが、全体数からすると、やはり企業の建物が多く、ビジネス街の様相を呈している。

「迎えって、まさか俺と同じく転入生候補じゃないだろうな？」
「や、違います。用事で東京まで旅行に行ってた人のお迎えなんですけど……」
「単車（オート）で？　しかも2人乗りなのに？」
「やー……本当にお迎えするだけですね」
「なんか歯切れ悪いな？　あの理事長から話すなとでも言われたのか？」

部室で『お願い』をして来た際、つばめは樹里に、十路には聞こえないように耳打ちしていた。
それを聞いた樹里は、少し戸惑った様子ではあったものの了承したので、十路も別段気にしていない事にしていた。

「後で堤さんを驚かせたいそうですよ」
「相手、有名人？」

「まぁ、一部の人には有名人ですね」
つばめが口止めしているせいで、樹里の返答はハッキリしない。だからこれ以上の詮索は諦めて話を変える。
「『杖』が必要ってことは、ヤバいのか？」
オートバイはそのまま直進し南下、海上道路を進む。
交通量も多少減り、ほぼ直線になったので、十路は後ろを少しだけ振り返る。
しかし言葉とは裏腹に《魔法使いの杖（アビスツール）》――２ｍにもなる長杖を樹里を持たず、片手を十路のベルトを掴み、もう片方の手でスカートを押さえている。
「そういうわけではないですけど、いざって時になにもできませんし、それに身分証明に便利ですから」
「１８０億円の身分証明書……やっぱり扱いがぞんざいだな」
「今日から大切に扱いますってば！」
向かう先は人工島を通り抜け、更に先にもう一つの人工島、神戸空港。
話しているうちに、オートバイは空港に到着。有料駐車場に駐車し、２人はヘルメットを脱ぎ、ターミナルビルに入る。
「で、まさか俺の時みたいに、相手に待ちぼうけ喰らわせてないだろうな？」
「ちょっと危ない時間ですね……」
「おい……」
「文句はつばめ先生に言ってくださいよぉ……堤さんの時も、時間過ぎてから聞いたんですし」

神戸は世界的にも珍しい地理的条件に恵まれた《魔法》の研究都市。だからこの空港には人の出入りが多い。
この中で人ひとり探すのは、かなり骨だと十路は覚悟するが。

「堤さん、こっちです」

別の方向を見ていた樹里が、十路の服を軽く引っ張って導く。どうやら簡単に見つけたらしい。
相手のその姿を見て、簡単に見つけた理由を納得する。
機内で電源を切っていたから、早速メールチェックでもしてるのか、ゲート近くの壁際でスマートフォンを操作している、ヨーロッパ系の金髪碧眼の女性。
側に小さなスーツケースを置き、女性らしい曲線を描く体を、カーディガンと白のサマードレスで覆っている姿だけで判断すれば、周囲の旅行客に紛れてしまいそう。しかし理知的な美貌と誰もが彼女に一度は振り返る空気を持っているため、人ゴミの中でも目立つ。

「あら、木次(きすき)さん？」

樹里が声をかける前に、その白人女性が小さな画面から顔を上げて、近寄って来る樹里を見つけ、親しげに話しかける。

「わざわざお出迎えに来てくださいましたの？」

その口から出てくるのは、外見からは意表をつく流暢な日本語。

「はい、つばめ先生からぶ――じゃなかった、殿下をお迎えにあがるように指示されました」
「？」

なぜか『殿下』と呼ばれた女性が軽く首を傾(かし)げ、ハニーブロンドの長い髪を揺らし、樹里の共に立つ十路に視線を移す。

「木次さん、そちらの方は？」

「堤十路さん、防衛部の体験入部をされてる方です」

「あぁ、なるほど……」

女性がスマートフォンをポケットにしまい、気さくな笑顔と右手を十路に差し出す。

「初めまして。コゼット＝ドゥ・シャロンジェと申します」

が、十路は固まって動かない。

「……ちょっと待て、木次？　《付与術士(エンチャンター)》がどうして……？」

「あら？　私(わたくし)のその名前をご存じですか？」

「少なくとも日本の《魔法使い》で知らなかったらモグリです……」

十路が《魔法使い》だと知って尚、過剰な反応なしに微笑む女性の正体。

立憲君主制国家、つまり王政が残るルクセンブルグ公国第3位の王位継承権を持つ、本物の王女。

そして若干20歳にして、日本における理学と工学の博士号を持つ、その分野の研究の第一人者。

親しみやすい人柄とは裏腹に、技術研究者としても、外交の相手としても、国家的な重要人物。

「堤さんがコゼット殿下をご存じなら、研究成果もご存じですよね？」

「あぁ……空間圧縮技術の確立」

それは魔法を応用させ、密閉した空間を人為的に操作し、実際以上に容積を増やす次世代技術。

つまりゲームでは当たり前に存在する、いくらでもアイテムが入る魔法の入れ物を、初期段階ながら現実に作ってしまった。

だから彼女は魔法の物品を作る特殊な生産能力保有者――《付与術士（ヤンター）》と呼ばれる。

「私が行ったのは基礎技術の作成だけ。しかもまだまだ実用段階には程遠いです」

運輸業界に革命を起こす驚異的な技術だが、彼女の言葉通り、現状ではまだ問題が多いため、その技術は市民生活までは広まってはいない。

そのため彼女は、科学技術分野ではかなりの有名人ではあるが、一般人は知らないであろう。もし知られていたとしても、それは『美人の王女様』という肩書きの方。

「それから、どうやら貴方は、木次（きすき）さんと私の関係に驚いているようですね？」

「えぇ、まぁ……」

「修交館学院のご協力があってできた研究ですし、現在も都市防衛部で継続実験を行ってもらっていますので、理事長や木次（きすき）さんとも顔なじみなんです」

「……」

カウンセリングルームどころではなく、人類史上に残る発明に貢献していた都市防衛部の実態に、十路は絶句する。

「……謎が多い方と聞いてましたので、まさか日本でお目にかかれるとは、思っていませんでした」

十路は差し出されたままのコゼットの右手を握る。『相手は王女様だから、手の甲に口づけしろって意味じゃないよな？』と若干の不安を持って。

「国の者からすると、王族らしからぬ行動をする私は恥なのですよ。だから日本にいるのも公（おおやけ）にはされていないのです」

ただの握手で正解だったらしい、自然な笑顔を崩さないまま、コゼットが返す。

「防衛部のように、私の思惑で動いて頂ける《魔法使い》の方々がおられると、非常に都合がよろしいので、現在は神戸（ここ）を拠点に個人で活動しています」

「研究機関や企業とは契約してないんですか？」

「……契約してると言えばしてますけど、基本的にはフリーです。実家の都合もありますので……」

少し言いづらそうなコゼットの言葉に十路も納得。歴史ある家はなにかと制約やしがらみが多い。

王家を『実家』と呼ぶのは妙な気がしないでもないが。

00_080　PM17：55　コゼット・ドゥ＝シャロンジェ（後書き）

転生モノではないですが、テンプレート『王女様』追加。
ちなみに現実では『ルクセンブルグ大公国』で、微妙にフィクション入っています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0589ba/

SSSS

2012年1月6日18時53分発行